

## ずいそう

## 江戸に学ぶ

前田 純一郎



今、藤沢周平にはまっている。

昨年未だに短期間ではあったが、生まれて初めて入院生活を送ることになった。そのとき、たまたま手にしたのが、1冊の藤沢周平の文庫本で、それ以来その魅力に取り憑かれてしまった。藤沢作品には、江戸の町の職人や商人など名もない庶民を主人公にしたものが多く、江戸の町の情緒や人情にあふれており、読後には、じわりと温かく心を満たしてくれるのがたまらない。

さて、筆者は建設会社で20年以上にわたって建設における自動化やロボットの研究開発に関係してきた。はまってしまったと言ってもよい。どうも「はまりやすい」のが筆者の性分ようで、多分死ぬまで直らないだろう。

藤沢周平の作品には、江戸の町の暮らしぶりがきめ細かく描かれている。それを読むうちに、江戸の町には、混沌の時代といわれる21世紀の我々が学ぶべき点、ヒントにすべきことが随所に溢れていることに気が付いた。

## ■匠のわざ

江戸の町には、ありとあらゆる職種の職人がいたといわれている。彼らは、社会的には低い地位におかれていたが、自分の腕には自信を持っており、技を極め、守り、伝承しようとした。まわりの人々にもそのような職人＝匠に対する敬意のようなものが根付いていた。わが国は資源が乏しく、工業製品を生産して生きていくしかない国である。それにもかかわらず、昨今、子供たちの理科ばなれ、理工系離れが年々進んでいるのは由々しいことである。ものづくりを大切にすることを復権することが必要である。子供たちには、ものづくりの楽しさを、社会的には、匠を尊敬する風潮を復活させるべきである。

## ■スローライフ

江戸の庶民は、自然と共に生活していた。日が落ちて暗くなると眠り、朝日が昇ると起き出して生活を始めるという暮らしである。20世紀の高度成長時代は、時間に追われ、自然を破壊し、コミュニティを壊し、人間性も見失ってしまうような日々であった。これからは、失われた人間性を取り戻し、身の丈にあったライフスタイルが見直される時代となるのではないか。文明の利器を全部捨ててまで江戸時代に戻る必要はないが、そこにはヒントになる生活の知恵がたくさん転がっている。

## ■資源を大切に

江戸の人々は、資源を大切にしていた。どんなものも徹底的に使い切ろうとし、何度も何度も繰り返して使った。例えば、晴れ着は、使えなくなると、子供の浴衣に仕立てなおし、赤ちゃんのオムツにし、最後は雑巾としてぼろぼろになるまで使い切った。また、鮎物資源に頼ることなく、自然の循環＝再生産が期待できる動植物資源の利用を基本にし、排泄物も徹底して活用したそうである。循環型資源の活用の他、リサイクルやリユース品の流通をスムーズにし、資源ごみの分別や回収を効率よく行い、自然環境をきめ細かに見守る、など、今の我々がお手本とすべきことは多い。

## ■コミュニティと共創

江戸の人々は、防犯・防火から道路の補修、子供の教育にいたるまで、身の回りのあらゆることを、「お上」の手を借りることなく、地域の手ですべてやったそうである。彼らの暮らしの中心はいわゆる長屋であった。この長屋の住人の生活は貧しかったが、結束は固く、一人暮らしの浪人者や身寄りのない年寄りの食事や身の回りの世話などは、長屋のおかみさん達が手分けしてやるなど、思いやりといたわりの精神に満ちていた。博報堂の井徳正吾氏はこれを、「共創」と表現されている。コミュニティを大事にすることと思いやりの精神は、今一番欠けていることである。

## ■ユニバーサルサービス

江戸の町のユニバーサルサービスもこの「共創」の心から生まれたのではないかと、湯島の「男坂」「女坂」がその好例だと、井徳氏は言われている。最近、沖縄の首里城に行く機会があったが、見学路は急峻な階段であった。これでは、身体の不自由な方は無理だろうと思ったが、少し離れたところに、車いす専用のスロープの通路が整備されていた。さらにその道端にはきれいな草花が咲き乱れており、温かな心配りを感じた。

ユニバーサルサービスは、これからのキーワードの一つである。ITやロボットの技術はそれを支援できるかもしれない。この技術は、人にやさしいきめ細かなサービスを提供する可能性を秘めている。江戸の「共創」の社会を、ITやロボットで現代に再現できないだろうか。最後に少しだけ我田引水させていただいたことをお許し願いたい。

—まえだ じゅんいちろう 清水建設株式会社技術研究所所長補佐—